

キリスト教の貢献心¹

ランドル ショート

訳 中谷献一

序章

本稿の目的は、キリスト教の3つの大きな宗派である、東方正教会、ローマ・カトリック、プロテスタントにおける「貢献心」²の主要な源を考察することである。読者は、この3つの伝統の間だけではなく、それぞれの中にもあまりに大きな多様性があることをよく知っているだろう。そのため、すべての宗派の人々が自分たちのものと認めることができるような結論を導き出すことができるのかと疑問に思うのは当然である。しかし、これらすべてのキリスト教の伝統が、「他者に尽くしたいという思い」を絶えず養い、形づくる共通の源を共有している。多くのクリスチャンは、それを隣人愛への情熱と呼ぶ。その共通の源は、キリストの受肉や十字架上の苦難と死、そして死者からの復活などの彼らの中心的教理や典礼習慣に見出すことができる。

キリスト教的貢献心を考察するアプローチ

毎週日曜日、キリスト教の礼拝者たちは、彼らの救い主イエス・キリストの地上での生涯と死、そして、復活を思い起こし、彼らとこの世界のためのこれらの出来事の意味を心に刻むために集まる。また、彼らは、アドベント（待降節）やクリスマスにはキリストの誕生に、レント（受難節）やイースターにはキリストの苦難と死、そして復活を特に集中して祝う。典礼の実践や強調点の違いによって、キリスト教会内の教団や伝統は多様化している³。しかし、すべての礼拝共同体は、キリストの誕生を、人の救いのために神御自身が人の肉体をとられた時-やがて「受肉」と呼ばれるようになった-として祝う。そして、聖餐式に加わり、受難節と聖金曜日（受難日）を守る時、彼らはキリストの苦難と死がどれほどに彼らに益をもたらすものであるかを思い巡らす。キリストの復活も、また、彼らにとって、新しい創造の始まりと死への勝利の希望とし

¹ 本稿の英語版は、一般財団法人ホモコントリビューエンス研究所、「貢献する気持ち」研究レポート集のページ（<http://www.homo-contribuens.org/kokenkenkyu/>）にて、“19. 「The Heart of Contribution in Christianity」/J. Randall Short”として掲載されている。翻訳に協力してくれた中谷献一氏に感謝の意を表したい。

² 「貢献心」や「貢献する気持ち」という表現は、滝久雄『貢献する気持ち』（東京、紀伊國屋書店、2001年）によるものである。英訳の Hisao Taki, *Homo Contribuens: The Need to Give and the Search for Fulfilment* (Kent, U.K.: Renaissance Books, 2008) においては、“the urge to contribute”や“the need to give”などと訳されている。『貢献する気持ち』において滝は、「貢献仲間」という意味で、人類を「ホモ・コントリビューエンス」と名付けている（77頁）。滝は、人間が自然によって「貢献心」とみなすことのできる「心質的本能」に恵まれているとする（72頁）。滝によれば、この貢献心とは、「他者に尽くしたいという思いをもたらす本能」である（84頁）。私たち人間には、自己中心的性質や快樂主義的性質もあるが、これらは他者の人生に貢献しようとする自然な気持ちと内的な葛藤を生む（71頁）。しかし、滝は、さらに論じる。もし私たちが、「自分」について分析し、他者との関係においてそれを理解するなら、または、「見えないものから生じる出来事を察知する感性と、それがどのような本質を内包するものなのかを考える探究心」を發展させるならば、私たちは、「見えない貢献心を自分のなかに設定」することができる、と（82頁）。

³ キリスト教礼拝の教派的伝統的多様性に関しては、多くの有益な文献が存在する。例えば、Geoffrey Wainwright and Karen B. Westerfield Tucker, eds., *The Oxford History of Christian Worship* (New York: Oxford University Press, 2006); Charles E. Farhadian, ed., *Christian Worship Worldwide: Expanding Horizons, Deepening Practices* (Grand Rapids, Mich.: Eerdmans, 2007); Gail Ramshaw, *Christian Worship: 100,000 Sundays of Symbols and Rituals* (Minneapolis, Minn.: Fortress Press, 2009)などを参照のこと。

て祝うべき出来事である。

教会教父から現代に至るまで、神学者や哲学者は「イエス・キリストは完全に人間であると同時に完全に神である」という教会の告白について議論してきた。本稿には、「正統的」⁴、もしくは、「異端的」とみなされてきたキリスト教教理について説明したり、それらが発展してきた歴史を論じる紙幅は無い。そのためには、三位一体やキリストの二性一人格など、カルケドン信条やその他の初期信条において取り上げられている神学論争に関して、多岐にわたる議論をしなければならない。もちろん、そのような議論は、これまでの数世紀の間に様々な伝統に属する教会の指導者や神学者たちが、キリストの誕生、苦難と死、復活に基づいて語ってきた理論や特徴を適切に理解するためには重要である⁵。しかし、そのような難解な研究によらなくても、これらの教えが大多数のキリスト教徒に与えた一般的な影響を理解することはできる。彼らは、あくまで、それらの教えを「当然のこと」として受け入れたただけだからである。

それゆえ、本稿では、正教、カトリック、プロテスタント教会のほぼすべての信者たちがキリストに関するこれらの教義を「当然のこと」として受け入れているという前提にたつて、以下の二点に関して考察する。第一に、キリスト者たちが、キリストの誕生、苦難、死、復活をどのように神御自身の「貢献」として記憶しているかということ考察する。また、第二に、その結果として、この記憶、あるいは、アナムネシスが、どのようにして他者に対する彼ら自身の貢献を動機付け、形づくっているのかを考察する。「アナムネシス」という言葉は、今も教会で聖餐式⁶として記念されている「最後の晩餐」において、イエスが弟子たちに語った「わたしの記念として[*anamnēsin*]このように行いなさい」⁷という言葉に由来する。英国国教会の祈禱書、*Common Worship: Times and Seasons*は、キリスト教礼拝におけるアナムネシスの意義と意味を分かりやすく説明している。

私たちのキリスト教的記憶を構築することを通して、つまり、アナムネシス（英語では“remembrance”と訳されるが、それは十分にこの語彙の意味範囲を反映していない）の過程において、過去は私たちの現在に入ってくるのである。…この力強い創造的記憶は、ユダヤ教の伝統、特に過ぎ越しの晩餐に深く根ざしている。この食事をともに準備し、ともにいただくことは

⁴ 「正統的」（小文字の“orthodox”）とは、「正しい」とみなされたもの、特に紀元後の数世紀に行われた教会会議において承認されたものを指す。「正教」（大文字の“Orthodox”）とは、一般的には「東方正教会」と呼ばれるキリスト教の宗派をさす。

⁵ Gerald O’Collins SJ, *Christology: A Biblical, Historical, and Systematic Study of Jesus* (2nd Edition; Oxford: Oxford University Press, 2009)を参照のこと。様々な角度からキリスト論（Christology）を考察する書物として広く用いられている。古代から議論されてきた課題に加え、現代的課題を扱っている論集としては、Veli-Matti Kärkkäinen, *Christology: A Global Introduction* (Grand Rapids, Mich.: Baker Academic, 2003)がある。

⁶ この「最後の晩餐」に由来する典礼を、東方正教会では「聖体儀式」、カトリックでは「聖体拝領」、プロテスタントでは「聖餐式」などと呼ぶ（英語では“the Eucharist”、“Holy Communion”、“the Lord’s Supper”などと呼ぶ）。本稿では、厳密な使い分けはしなかったが、多くの場合、「聖餐式」（英語では“the Eucharist”）という呼び名を用いている。

⁷ ルカによる福音書22章19節とコリントの信徒への手紙第一11章24節を参照。*anamnēsis*（アナムネシス）が辞書形で、*anamnēsin*（アナムネシン）はその対格変化した形である。

記念（ヘブライ語：ジッカロン。出エジプト記 12 章 14 節と 13 章 9 節を参照）の行為である。過去のエジプトからの脱出の出来事において体験された神の贖いの力が、現在において新鮮な形で体験されるのである。⁸

そこで、私たちの目的は、キリストにおける神の贖いの力の想起、すなわち「力強い創造的記憶」がどのようにキリスト教における貢献心を育てるのかを理解することである。

もう一つのアプローチは、隣人への積極的で犠牲的な愛を命じるイエスの倫理的教えのいくつか、もしくはそのうちの一つに集中して考察することである。例えば、「黄金律」⁹と呼ばれるものや、「第二の最も重要な命令」¹⁰と呼ばれるものである。実際、このアプローチは、キリスト教倫理に関する多くの研究に共通する¹¹。これは、実り多い道ではあるが、今回の目的には適していない。それは、キリスト教の「貢献する本能」を動機付け、形成するものを捉えるという目的に反して、あまりに限られた視点での議論になってしまうからである。その中でも大きな問題は、これらの戒めだけに集中することがキリスト者たちを隣人を愛するようという召命に従わせる根本的な動機を見失わせる可能性があるということだ。また、このアプローチには別の問題もある。確かにキリストの教えは、社会に貢献しようという強い願いをもって行動しているキリスト者に刺激を与え、彼らを導く。しかし、キリスト教的な利他的態度を明確に説明しようとする立場にとっては、キリスト自身が教えたキリスト「の」教えよりも、あらゆる伝統におけるキリスト「についての」教えの方が大切である。なぜなら、それぞれの教派や教理におけるキリストについての教えが、信者たちがイエスの教えを理解し、従うための解釈の枠組みを与えているからである。

キリスト教の主要宗派のすべてにおいて、神と隣人を愛することが、彼らに対する神の愛を経験した個人や共同体にとっての自然な応答と言える。滝の言葉を借りるなら「本能的な」応答と言っても良いだろう¹²。この視点を示唆する有名な聖書箇所を考えてみると良い。

わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。¹³

キリストがわたしたちを愛して、御自分を香りのよい供え物、つまり、いけにえとしてわたしたちのために神に献げてくださったように、あなたがたも愛によって歩みなさい。¹⁴

⁸ *Common Worship: Times and Seasons* (London: Church House Publishing, 2006), 1. キリストによる救いの「記念」に関する倫理的な要求を学術的に扱ったものでは、Bruce T. Morrill, *Anamnesis as Dangerous Memory* (Collegeville, Minn.: The Liturgical Press, 2000)、特に 4 章の“Christian Memory: Anamnesis of Christ Jesus”を参照。共通の関心について研究したものとしては、アナムネシスが聖餐式におけるキリストの現臨を仲介することと論じている Wolfhart Pannenberg, *Systematic Theology*, Vol. 3 (London: T&T Clark International, 2004), 305–24 を参照。

⁹ 「だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。これこそ律法と預言者である。」(マタイ 7: 12)。聖書の引用は、すべて新共同訳聖書(東京、日本聖書協会、1987年)を用いる。

¹⁰ 「隣人を自分のように愛しなさい。」(マタイ 22: 39)

¹¹ キリスト教倫理に関する研究はここに記すには膨大である。役立つ概要や、各論の紹介、文献目録に関しては、Robin Gill, ed., *The Cambridge Companion to Christian Ethics* (Cambridge: Cambridge University Press, 2001); Gilbert Meilaender and William Werpehowski, eds., *The Oxford Handbook of Theological Ethics* (Oxford: Oxford University Press, 2005)を参照。

¹² 滝、『貢献する気持ち』、72–74 頁。

¹³ ヨハネの福音書 15 章 12 節。話者はイエス・キリストである。

¹⁴ エフェソの信徒への手紙 5 章 2 節。

夫たちよ、キリストが教会を愛し、教会のために御自分をお与えになったように、妻を愛しなさい。¹⁵

そこで、あなたがたに幾らかでも、キリストによる励まし、愛の慰め、“霊”による交わり、それに慈しみや憐れみの心があるなら、同じ思いとなり、同じ愛を抱き、心を合わせ、思いを一つにして、わたしの喜びを満たしてください。何事も利己心や虚栄心からするのではなく、へりくだって、互いに相手を自分よりも優れた者と考え、めいめい自分のことだけでなく、他人のことにも注意を払いなさい。互いにこのことを心がけなさい。それはキリスト・イエスにもみられるものです。キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。¹⁶

わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからです。¹⁷

キリスト教の伝統がこの初めの、先行する神の愛を語る根拠は、神の子の受肉、御子の受難と十字架上の死、復活、昇天を中心とする物語である。そして、聖書の朗読と説教、聖餐の礼典、教会歴に沿った聖日や祭日の礼典、その他多くの実践のために開かれる定期的な集会の中心的な目的は、この神の愛の定期的なアナムネシス、能動的な記念である。

キリスト教における「貢献心」、つまり、キリスト教において他者に奉仕し、貢献しようとする強い願いを促し、形成するものは何かということを理解するためには、他者への貢献の源泉であり、模範である神の貢献を啓示する物語を「想起」する方法について考える必要がある。それゆえ、これ以降は、神の貢献の「メタ・ナラティブ」の筋と用法を短く考察する。そこで、私たちは、キリスト者たちが彼らのうちに貢献心を呼び起こすキリストを通して、どのように神の自己贈与的愛の体験を経験するかを理解するために、特に待降節、降誕節、受難節、復活節に注目しながらキリスト教の教会歴の物語（narrative arc）に従って考察する。

アナムネシスによる貢献心の育成

キリストの誕生と苦難、死、復活の物語の想起がどのように他者への貢献心を動機付け、形作るのかを理解するためには、それがどの宗派でいつ行われるものであれ、その礼典や儀式の特定の要素、そして、機能について考察する必要がある。つまり、聖書朗読、信条の告白、祈り、説教、讃美歌や詩篇を歌うこと、サ

¹⁵ エフェソの信徒への手紙 5 章 25 節。

¹⁶ フィリピの信徒への手紙 2 章 1-8 節。フィリピという都市にいるキリスト者たちに使徒パウロが書いた手紙であるが、この箇所ではパウロが初期のキリスト論を含んだ当時の讃美歌が引用し（6-11 節）、「他人のことにも」仕えるようにと読者を奨励しているという点で特に注目すべきである。この箇所を論じる論文の中でも、倫理的意義を扱う文献としては、Ralph P. Martin, *A Hymn of Christ: Philippians 2:5-11 in Recent Interpretation & in the Setting of Early Christian Worship* (Downers Grove, Ill.: InterVarsity, 1997); Ralph P. Martin and Brian J. Dodd, eds., *Where Christology Began: Essays on Philippians 2* (Louisville, Ky.: Westminster Knox, 1998)を参照。

¹⁷ ヨハネの手紙第一 4 章 19 節。

クラメント（機密・秘跡・聖礼典）を行うことなど¹⁸の機能について考察するということである。キリスト教の多様性を考慮するならば、過度の一般化は避けなければならないが、それでも、以下のような考察は可能である。

神の貢献の「大きな物語」（メタ・ナラティブ）

第一の点は、キリスト教信仰の「物語的」性質を認識すること、そして、その物語が人間の歴史における神の行為をどのように神の人間への貢献として描いているかということである。紀元後初期の頃から、最も有名な使徒信条やニカイア信条に表現されている「信仰の基準」（*regula fidei*）¹⁹は、特定の物語、もしくは「大きな物語」（メタ・ナラティブ）を表現し確認してきた。これらの信条を告白することを通して、キリスト教徒たちは自分たちのアイデンティティを形成してきたのである²⁰。この自己同一化は、大きく見れば、 sacramentや典礼がある特定の物語を土台とし、また、その特定の物語を中心として成り立っているがゆえに起こる。これらの特定の物語には、天地創造の物語、人間の墮落物語、贖罪の物語、終末の物語があるが、それらはキリスト教的な読み方では旧新約聖書を一貫した神の大きな物語として読まれる。それは、「貢献」が中心にある物語、すなわち、神的貢献、神の自己贈与²¹が中心にある物語である。キリスト教の大きな物語の大筋は、次のようにまとめられる。

父なる神は良い世界を創造し、自分の似姿（イメージ）にしたがって男と女を造った。そして、この世界を管理し、互いに支え合うように彼らに命じた。しかし、人間が神に逆らったとき、人間と神との関係も、人間同士の関係も、人間と世界との関係も壊れてしまった²²。

しかし、「時が満ちた時」、神の御子は墮落した世界に入ってきた。彼は人間の性質をとることで、自らも神の定めた律法に従う者となった。聖書も、信条も、典礼も、神が人類の救済のためにそのひとり子を「遣わした」、「お与えになった」とはっきりと告白している。伝統的で正統的なキリスト教において、神の子の受肉は、世の真理を教え、偉業を成した偉人の偶然たる誕生として見做すことはできない。むしろ、受肉に関するキリスト教の教理では、イエス・キリストの降誕を通して、神が人類を積極的に、そして、完全に受容したことが強調される。

¹⁸ 礼拝論と実践に関する広範な問題を、あらゆる宗派教派を概観しながら学術的に扱った論文としては、Cheslyn Jones, Geoffrey Wainwright, Edward Yarnold, and Paul Bradshaw, eds., *The Study of Liturgy* (Revised Edition; New York: Oxford University Press, 1992)を参照。

¹⁹ 16世紀において、プロテスタント宗教改革者たちは、「信仰の基準」を表わすために聖書の言葉を用いた。しかし、それ以前の典礼では、使徒信条の言葉が多く用いられた。カトリックや正教においては今日でもそうである。信仰基準の歴史的かつ簡潔な概要としては、Geoffrey W. Bromiley, "Rule of Faith," in *The Encyclopedia of Christianity*, Vol. 4 (ed. Erwin Fahlbusch and Geoffrey W. Bromiley; Grand Rapids, Mich.: Eerdmans, 2005), 758–59がある。

²⁰ この点に関して特に役立つ研究としては、Paul M. Blowers, "The *Regula Fidei* and the Narrative Character of Early Christian Faith," in *Pro Ecclesia* VI, no. 2 (1997): 199–228を参照。

²¹ 「献身」とも言える。

²² 聖書と典礼的習慣における様々なメタファーや象徴によって、礼拝者たちは自分たちを神から離れた者として想起する。例えば、彼らは自分自身を神と律法とに反する敵対者、この世と悪霊と罪の奴隷、天の父の元から迷い出た失われた羊、払い切れない負債を負った者、重荷を運ぶ者、汚れた不純な者、病人、暗やみに迷う者、その罪のために死の罰を免れない罪人、罪の中にすでに死んでいる者として自らを「想起する」。これらと対応するように、彼らは、また、様々なかたちでキリストを想起する。神と彼らを和解させるため、彼らを罪とこの世と悪霊の束縛から解き放つため、彼らを父なる神に買い戻すため、彼らを捜し見つけるため、彼らの負債を払うため、彼らの重荷を軽くするため、彼らを洗いきよめるため、彼らを癒すため、暗やみから導き出すため、彼らの受けるべき罰を代わりに受けるため、彼らの魂を生き返らせるために来た救い主である。

神の御子イエス・キリストは律法に完全に従ったが、それにも関わらず、犯罪者として苦しめられ、のろわれた死に方とされる十字架で処刑された。この死は、永遠に神と断絶されるという死の宣告を受けていた人類の身代わりとしての刑罰であった。これによって、罪と悪を許容しないという神の義は達成された。それゆえ、イエス・キリストの苦しみと死は、少なくとも神の視点から見れば、予測不可能な残念な出来事とは理解されない。むしろ、それは、神が意図的に犠牲的に人類の痛みや苦しみに参与されたことの証拠なのである。しかし、この物語は苦しみと死の絶望では終わらない。

イエス・キリストは死から復活し、天に昇り、父なる神の右の座に着いた。そのとき、神は死そのものを克服されたのである。そして、神の御子はそこで万物を支配し、時が満ちるのを待っておられる。これらすべては、神がご自分の聖霊の働きを通して行われたことである。神は、地上において「キリストのからだ」と呼ばれる教会が、世界に対して神の愛と恵みを仲介することを励ますために聖霊を送った。伝統的なキリスト教においてイエスの復活は、物質的にも霊的にも、その現実性を割り引いて説明することはできない。むしろ、復活は、神が絶望的な状況に置かれている人を、そこにある苦しみや死の現実には確かに打ち勝たせることができるお方であることを表わしている。

神の貢献の受け手となり、仲介者となる

この「大きな物語」の概要を確認したところで、次にこの物語が、礼拝において全体的に、または部分的にどのように機能しているか、また、この物語がどのようにして他者に貢献する気持ちを引き起こすかについて考察しよう。そこで、受肉を始めとするこれらの物語が、如何に礼拝者たちの個人的な物語となるのかを理解することが重要なポイントである。彼らは、キリストの降誕と苦しみ、死と復活を 2000 年前に起きた歴史的出来事として受け取っている。しかし、彼らは、ただの歴史の授業のように、信条を暗唱し、説教を聴き、讃美歌を歌い、祈ることはしない。また、イエス・キリストが受肉した神に他ならず、それゆえイエスの死と復活は普遍的な重要性のある出来事なのだ。「未信者」に証明するために、週ごと、季節ごとの典礼を行うことが主な目的でもない。繰り返しになるが、これらの教理は、あくまでキリスト教の集会の前提なのである。

むしろ、キリスト教の礼拝の主な目的の一つは、礼拝に集った人々が自分自身がどのようにしてこの福音の物語の登場人物となったのかを記憶できるように助けることである。彼らは、礼拝の中での典礼的アナムネシスを通して、自分たちが神の恵みを受け取り、それらを仲介する者になったことを記憶するのである。洗礼、聖餐式、聖書朗読、讃美歌を歌うこと、説教、祈祷、その他の典礼式は、特にイエスの受肉、苦難と死、復活に関する福音の大きな物語に人々を招き入れることによって、この「記憶」を促進する。それゆえ、キリスト教の大きな物語を「記憶する」ことが、どのようにキリスト教礼拝者たちにキリストとの結合を確信させ、神が彼らを愛したように他者を愛すること（滝の言葉で言うならば、神が自分たちに貢献したように、自分たちも他者に貢献すること）を促すのかを、受肉から始めてさらに綿密に考察してみよう。

キリストの受肉：他者を受容するという貢献

クリスマスの時、キリスト教礼拝者は、「今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである」²³という「大きな喜びの福音」を想起する。そのとき、礼拝の中で詠まれる詩篇や歌われる讃美歌、ささげられる祈り、聖書朗読で語られる登場人物たちの「私」や「私たち」（字義通りの場合もあれば、暗示される場合もある）に自らを同一化させながら、礼拝者たちは自分たちにとってキリストの誕生がどのような意義や関係をもっているのかを思い起こす。例えば、彼らがルカによる福音書のクリスマス物語を読む際、礼拝者たちは自分たちを救い主を待ち望んでいる羊飼いたちと重ね合わせて考える。彼らは、聖書を歴史的状況を超越した神のことばとして理解しているため、そこに記されている「大きな喜びの福音」を自分たちに向けられたものとして受け取るのである。「今日…あなたがたのために」という言葉は、2000年前に羊の群れの番をしていた羊飼いたちに語りかけられたように、「今」「ここで」集まる会衆たちに語りかけられている言葉なのである。

クリスマスの讃美歌やキャロルは、典礼的アナムネシスがキリストの受肉を信者にどのように体験させるのかを示す、よい例である。多くの讃美歌の歌詞が現在形で記されているため、それらは歌っている会衆によって彼らのための、いま現在の祈り、宣言、礼拝への招きとなる。例えば、歌い手が羊飼いや東方の博士たちと自分自身を重ねながら歌う「アデステ・フィデレス」（直訳では「来たれ。信じる者たちよ」）²⁴の歌詞を見てみよう。

See how the shepherds, summoned to His cradle,

彼（キリスト）のゆりかごに招かれた羊飼いたちを見よ

Leaving their flocks, draw nigh to gaze;

自分たちの群れを離れて、（キリストを）眺めるために近づいてくる彼らを

We too will thither bend our joyful footsteps;

私たちも、そこに喜びに満ちた足取りで向かおう²⁵

Lo! star led chieftains, Magi, Christ adoring,

見よ！星が王を導いた。キリストをあがめる博士たちを

Offer Him incense, gold, and myrrh;

彼に黄金、乳香、没薬を捧げよ

We to the Christ Child bring our hearts' oblations.

私たちは子なるキリストに、私たちの心のささげものを持っていく

²³ これは、天使が羊の番をしていた貧しい羊飼いたちにキリストの誕生を告げたルカの福音書2章10-11節である。

²⁴ 聖歌集改訂委員会『カトリック聖歌集』（札幌、光明社、1966年）の113番「きたれともよ」、日本聖公会『日本聖公会聖歌集』（東京、日本聖公会管区事務所、2006年）の82番「みつかいの主なるおおきみ」、賛美歌委員会『賛美歌』（東京、日本基督教団出版局、1954年）の111番「かみのみこはこよいしも」などを参照。

²⁵ 『カトリック聖歌集』113番「きたれともよ」の第2スタンザ「み告げ受けて 羊かいは / 群れ打ちおきて 道いそぐ / いざ我ら 共に馳せ行かん」を参照。

同じ讃美歌の最後のスタンザの一つと、おりかえしにおける礼拝への招きは、礼拝者たちとキャロルを歌う人々がどのようにして「ここで、今」、個人的に受肉を体験していくのかをより明確に示している。

Yea, Lord, we greet Thee, born this happy morning;

ああ、主よ。私たちは、この幸いな朝にお生まれになったあなたにお会いする

Jesus, to Thee be glory given;

イエスよ、あなたに栄光が与えられるように

Word of the Father, now in flesh appearing.

父のみことばよ、今、肉体を取られたお方よ²⁶

O come, let us adore Him,

O come, let us adore Him,

O come, let us adore Him,

さあ、来て、彼をあがめよう

Christ the Lord.

主なるキリスト²⁷

もしくは、“Little Town of Bethlehem”「ああベツレヘムよ」の最後のスタンザを見てみよう。

Oh holy Child of Bethlehem, descend to us we pray

ああ、ベツレヘムの聖なる子よ、私たちは祈る。降りて来てください

Cast out our sin and enter in, be born in us today

私たちの罪を追い出して、お入りください。今日、私たちの内にお生まれになってください

We hear the Christmas angels, the great glad tidings tell

私たちはクリスマスの天使(の声)を聞いている、大いなる喜びの知らせが宣べ伝える

O come to us, abide with us, our lord Emanuel.

ああ、私たちのところに来て、共にいてください。私たちの主、インマヌエルよ²⁸

²⁶ 『日本聖公会聖歌集』82番「みつかいの主なるおおきみ」の第4スタンザ「うち集い この日を祝え / 神のみ言 人となり / 今日生まれ 世にあらわれぬ」を参照。

²⁷ 『カトリック聖歌集』113番「きたれともよ」のおりかえし「来たれ拜まん 来たれ拜まん / 来たれ拜まん わが主を」を参照。

²⁸ 『カトリック聖歌集』の655番「ああベツレヘムよ」、『日本聖公会聖歌集』の85番と86番「ああベツレヘムよ」、『賛美歌』の115番「ああベツレヘムよ」などを参照。この三つとも、歌詞はほとんど同じだが、例えば、『賛美歌』115番では、「ああベツレヘムよ などかひとり / 星のみ匂いて ふかく眠る。 / 知らずや、今宵 くらき空に / とこよのひかりの 照りわたるを。 // ひとみな眠りて 知らぬまにぞ / み子なるキリスト 生まれたもう。 / あしたの星よ、うたいまつれ、 / 「神にはみ栄え、地に平和」と。 // しずかに夜露の くだるごとく、 / めぐみの賜物 世にのぞみぬ。 / 罪ふかき世に かかるめぐみ / 天より来べしと たれかは知る。 // ああベツレヘムの きよきみ子よ、 / 今しもわれらにくだりたまえ。 / こころをきよめ 宮となして、 / 今よりときわに すまいたまえ。」となっている。

キリスト教の聖書とその伝統によると、受肉によって、神は、人類を罪と死から救うという神だけが成し遂げられる課題に着手した。聖書と典礼の言葉は、自ら人間の世界に「介入」し、「降誕」せずにはいられなかった神の能動的な愛の結果として、受肉を描く。人々の状態がどのようなものであっても、世に介入した神は、彼らと変わることなくともいてくださり、彼らを受け入れる。キリスト教の伝統は、人が受肉によって啓示された神の先行する愛に価しないということに同意している。つまり、その愛は私たち人間の何らかの貢献に対する神の応答ではないのである。事実、いくつかの聖書箇所は、人間をその本性において神に敵対する者として描いている²⁹。しかし、聖書と教会の教えによるならば、それでもなお、神は遠く離れたまま、無関心で冷淡なままでいようとしなかった。そうではなく、神は、その人類への無条件の愛とあわれみのゆえに³⁰、人々が平安を受け取ることを願われた。そして、そのために生涯を生き、死なせるため、御子を送ったのである³¹。しかし、このことが、人間の貢献心にどのような関わりをもつのだろうか。

ある意味、キリスト教徒は受肉、ベツレヘムで起きたイエス・キリストの処女降誕の出来事を、二度と起こることのない歴史的な出来事と見ている。しかし別の意味では、正教会も、ローマ・カトリックも、プロテスタントの教会も、「今日、私たちの内にお生まれになってください」という歌詞にも見られるように、イエス・キリストの受肉は、人々の中に起こる継続的なリアリティとして捉えている。キリストは、信者たちに聖霊を与えられる。それは、その聖霊を通して、世界のあらゆる国や文化にある教会とともに、また、それらの教会のうちに住むためである。彼らが受ける洗礼は、一人ひとりが「キリストに結ばれるための洗礼」であり、教会という地上におけるキリストの体に結びつけられることを意味する³²。それゆえ、キリスト教徒にとって、キリストの受肉がもっている継続的な意義は、自分自身と他者との両方に方向付けられている。キリストは、「私」をありのまま受け入れ、愛してくださった。そして、いま、キリストの聖霊は、キリスト者のうちに宿っており、他者の人生に関わらせ、すべての必要とともに彼らを受け入れ、キリストが「私」を愛してくださったように彼らを受するように、地上におけるキリストの「体」であるキリスト者を促すのである³³。

²⁹ ローマの信徒への手紙 5 章 10 節、コロサイの信徒への手紙 2 章 21 節など。

³⁰ クリスマスの讃美歌である“Little Town of Bethlehem”の三番目のスタンザは、この点をよく表現している。二つ上の脚注も参照していただきたいが、以下、本文と私訳。

How silently, how silently, the wondrous gift is given

なんと静かに、何と静かに、そのすばらしい贈り物は与えられた

So God imparts to human hearts the blessings of his heaven

そうして、神は、人々の心に天の祝福をお分けになった

No ear may hear his coming, but in this world of sin

誰の耳にも、彼が来るのは聞こえない。しかし、この罪の世でも、

Where meek souls will receive him still, the dear Christ enters in.

従順な魂が彼を受け入れるところどこであれ、愛するキリストは入って来られる。

³¹ 典礼に関してもそうだが、このことは、キリストの苦難と死、復活と昇天、再臨の待望と終わりの時代との関係を抜きにして、誰も受肉の意味を完全に理解することはできないということの意味している。伝統的理解に立って受肉と復活の決定的なつながりを論じる近年の論文では、Paul D. Molnar, *Incarnation and Resurrection: Toward a Contemporary Understanding* (Grand Rapids, Mich.: Eerdmans, 2007)を参照。

³² 人々がキリストと他者と結ばれるという意味で洗礼を語る箇所としては、例えばローマの信徒への手紙 6 章 1-11 節、コリントの信徒への手紙第一 12 章 13 節、ガラテヤの信徒への手紙 3 章 26-29 節を参照。

³³ それゆえ、例えば、教会は、ルカの福音書のイエスの任務を自らのものと解釈できる。「主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、／主がわたしに油を注がれたからである。主がわたしを遣わされたのは、／捕らわれている人に解放を、／目の見えない人に視力の回復を告げ、／圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである。」(ルカ 4 : 18-19)

キリストの受難と死：他者のために苦しみ、死ぬという貢献

キリスト者は、神の自己献身の究極的な表現として、イエス・キリストの苦難と十字架上の死を「記憶する」。それは、神がすべてに「貢献」した、つまり「私」と他者の両方のために「貢献」してくださったという福音の物語である。このポイントを正確に理解することは、キリスト教における貢献心の主要な源泉に関する深い洞察をもたらすだろう。

毎回の聖餐式において、また、受難節の時期を通して、礼拝者はイエス・キリストが彼らのために払われた偉大な犠牲について深く瞑想する。聖餐式はキリスト教礼拝の中心的な位置を占める儀式で、イエス・キリストがイスカリオテ・ユダに裏切られ、ローマの十字架で処刑されるために引き渡された前夜に、その弟子たちともたれた「最後の晩餐」を記念する儀式である。この聖餐式の間、礼拝者は「あなたがたのために与えられる」と言われているイエス・キリストの割かれた体と、「あなたがたのために流されるわたしの血による新しい契約」³⁴を象徴する血を、「記念する」ためにパンを食べ、杯を飲む。彼らは、聖書朗読、交読文、祈禱、讃美歌、その他の典礼を通して、イエス・キリストの苦難と死の様々な側面を想起し、瞑想する。

礼拝者たちは、イエス・キリストの苦難と死についての「知らせ」を、彼らのための福音として受け止める。それは、彼らがこの犠牲によって自分自身が救われたと理解しているからである。本稿の目的を考えると、贖罪や聖餐についての、あるいは、イエス・キリストの苦難と死の意味についての宗派間の様々な神学的理解の相違を議論することは有益ではないだろう。ここでは、正統的な伝統における典礼がイエス・キリストの犠牲を、神の積極的な行為として受け入れるように礼拝者たちを導いていることが確認できれば十分である。つまり、それを通して神が、罪を赦し、罪と世と悪霊の奴隷となっている者を解放し、感情的・情緒的かつ霊的な傷や病いを癒し、罪人と和解し、神のさばきからの恩赦を与え、永遠のいのちの希望をもたらしてくださったと理解させるということである。

では、礼拝者たちがイエス・キリストの苦難と十字架上の死を「記念する」ための典礼用のテキストから代表的なものを短く考察しよう。ローマ・カトリックで“*Salve caput cruentatum*”（直訳では「傷つきし御頭よ」）と呼ばれる讃美歌は、受難節、特に聖金曜日によく歌われる古典的讃美歌である³⁵。それは、また、聖体拝領にあずかる際にもよく歌われる讃美歌でもあるので、一年のどの時期にも歌われる可能性のある曲である。典礼の他の部分もそうだが、この讃美歌が、神の愛に満ちた献身的な貢献が「昨日も、今日も、永

³⁴ これらは、ルカの福音書 22 章 17-20 節、コリント人への手紙第一 11 章 23-27 節からの引用である。これらの聖書箇所は聖餐式においてよく引用される。

³⁵ この讃美歌は、“*Salve caput cruentatum*”というラテン語の詩を元に作られた。“*Salve caput cruentatum*”は、伝統的に 12 世紀の修道士クレルヴォーのベルナルドゥスの手によるものとされてきたが、近年では 15 世紀の神秘主義者 A. von Loewen が作成したものと言われるようになっている。その詩が Lutheran Paul Gerhardt によって“*O Haupt voll Blut und Wunden*”と題してドイツ語に訳され、そのドイツ語版をアメリカの司祭で神学者の James W. Alexander が“*O Sacred Head Now Wounded*”と題して英語に訳した (Erik Routley, *An English-Speaking Hymnal Guide* [edited and expanded by Peter W. Cutts; Chicago: GIA Publications, 2005], 135)。しかし、その他の英訳も存在し、この讃美歌は一般的にローマ・カトリックとプロテスタントで異なったバージョンで歌われている。例えば、カトリックのものと違うバージョンのものが、20 世紀中盤に出版された *Armed Forces Hymnal* に掲載されている。詳しくは、Felicia Piscitelli, “Protestant Hymnody in Contemporary Roman Catholic Worship,” in *Wonderful Words of Life: Hymns in American Protestant History and Theology* (ed. Richard J. Mouw and Mark A. Noll; Grand Rapids, Mich.: Eerdmans, 2004), 151 を参照。日本語版のためには、『カトリック聖歌集』の 171 番「いばらのかむり」、『日本聖公会聖歌集』の 145 番「血しおしたたる」、『讃美歌』の 136 番「ちしおしたたる」などを参照。

遠に変わることはない」³⁶ということをして、どのようにして個人的かつ集団的にアナムネシスさせるのかを観察することは有意義だろう。多くのスタンザがあるが、ここではそのうちの2つだけを記す。

O sacred Head! now wounded,

聖なる頭よ！今、傷つけられた

With grief and shame weighed down,

悲しみと恥によって押し潰された

Now scornfully surrounded

今、嘲りに囲まれて

With thorns, Thy only crown;

いばらだけが、あなたの唯一の冠

O sacred Head! what glory,

聖なる頭よ！何という栄光

What bliss, till now was Thine!

何という幸いが、今まではあなたのものだったか

Yet, though despised and gory,

しかし、蔑まれ、血みどろであっても

I joy to call Thee mine.

あなたを私のものと呼べることは私の喜び

What Thou, my Lord, hast suffered,

私の主よ、あなたが苦しまれたことは

Was all for sinners' gain:

そのすべては罪人のためだった

Mine, mine, was the transgression,

その罪は私のもの、私のものだった

But Thine the deadly pain.

しかし、その死の痛みはあなたのもの

Lo! here I fall, my Savior:

見よ！ここに私はひざまずこう、私の救い主よ

'Tis I deserve Thy place;

私こそがその場所にいるべきだったのに

Look on me with Thy favor,

³⁶ よく知られた新約聖書の箇所であるヘブライ人への手紙 13 章 8 節の言葉である。「イエス・キリストは、きのうも今日も、また永遠に変わることはない方です。」キリスト教礼拝の複時間的な性質に関しては、後で再び言及する。

あわれみをもって私を見てください

Vouchsafe to me Thy grace.³⁷

あなたの恵みを私に与え給え

イエス・キリストへの祈りとして作詞されたこの讃美歌は、いくつかの点で苦難と聖餐の典礼を表わす良い例と言える。

最初のスタンザは、キリスト教の多くの典礼の物語的で描写的性質の典型である。礼拝者は、主に抽象的真理を瞑想するわけではない。この讃美歌は、例えば、十字架上でイエス・キリストを苦しめた「悲しみ」と「恥」について、礼拝者に瞑想するように導く。そして、このためにイエス・キリストは以前からもっていた「栄光」や「祝福」を捨てたということを礼拝者たちに覚えさせている。神は、簡単に、痛みを伴うことなく犠牲を払われたのではない。むしろ、受肉において神が完全に人間の性質をとったがゆえに、イエス・キリストの苦難と死には、無限の「痛み」が伴っていた。西洋では神が苦しむのかどうかという神学論争があったにもかかわらず、3つの主要なキリスト教の伝統は、聖書がキリストの苦難と死を自らの損失や利益を考えずにささげられた神の貢献として語ることに同意している。神の愛は、人間の理解を超越している。しかし、神の「貢献」は、子どもから高齢者に至るまで人生のあらゆる時期において理解することのできる形式と方法で与えられている。

2つ目のスタンザは、神の献身（自己贈与）に重点をおいているアナムネシスの個人的次元と集団的次元の両方を分かりやすく反映している。ここで、礼拝者はイエス・キリストが「私」の罪のために「死の痛み」を苦しんだということ「覚える」。「その罪は、私のもの、私のものだった。…私こそがその場所にいるべきだったのに」、と。朗読や歌、祈りのための多くの聖書箇所や典礼テキストと同じように、この讃美歌の全体的な強調点は、神が「私」のために払ってくださった愛の犠牲である。同時に、この讃美歌は、イエス・キリストの苦難と死は「すべての罪人のためであった」という認識を反映している。事実、公的な礼拝という文脈において他者と連帯して行うアナムネシスは、一人称で語られていても、キリスト教信者に人類全体の必要を覚える共感を養う³⁸。そして、神御自身はそのすべての必要をご覧になり、心配しているという認

³⁷ この英訳は、Philip Schaff, *Ichthus Christ in Song: Hymns of Immanuel* (New York: Anson D. F. Randolph & Company, 1870), 178–81 からのものであり、他のバージョンは 182–83 に掲載されている（“Ichthus”「イクテス」は、キリストを象徴する魚の形の像である）。Schaff は、この「古典的な讃美歌は、これまでラテン語からドイツ語に、ドイツ語から英語に翻訳されて3つの言語で歌われ、カトリックとルーテル、改革派の3つの教派の中で歌われてきたが、私たちの救い主のいのちをかけた愛とこの方への無限の恩義を実感させるという影響力はどこにおいても変わらず、不朽の活力を示してきた。」カトリックやルーテル教会、改革派教会だけでなく、その他のあらゆる教団教派において同じように用いられている。日本語では、例えば、『讃美歌』136番（『日本聖公会聖歌集』145番はこれに近い）はこうなっている。「血しおしたたる 主のみかしら、 / とげにさされし 主のみかしら、 / なやみとはじに やつれし主を、 / われは かしこみ きみとあおぐ。 // 主のくるしみは わがためなり、 / われは死ぬべき つみびとなり、 / かかるわが身に かわりましし / 主のみこころは いとかしこし。 // なつかしき主よ、 はかり知れぬ / 十字架の愛に いかに応えん。 / この身とたまを とこしえまで / わが主のものと なさせたまえ。 // 主よ、主のもとに かえる日まで、 / 十字架のかけに 立たせたまえ。 / み顔をあおぎ み手によらば、 / いまわのいきも 安けくあらん。」

³⁸ 個人だけでなく、会衆全体も、自分たちの人生経験によってキリストの犠牲の姿やその「結果」に特別な意義を見出すことは、一般的な事例である。例えば、救済が奴隷制や抑圧からの解放として特徴付けられていた黒人霊歌の多くを考えてみると良い。しかし、公的な礼拝に参加することを通して、礼拝者たちは彼らの救いの経験の周辺にある他の多くの方法を「覚え」させることのできる新しい祈りを祈り、新しい歌を歌い、新しい物語を聴く。そうすることによって、礼拝者たちは、彼らの経験を新しいレンズを通して再解釈し始めるのである。

識を彼らの間に植え付けるのである。

最後に、この讚美歌全体にも言えることだが、この両方のスタンザは、アナムネシスの複時的関心を表わす良い例である。2つ目のスタンザで過去形が使われている一文を除けば、一貫して現在形が用いられる。また、一つ目のスタンザの中だけで「今」という言葉が3回も繰り返される。それらによって、礼拝者たちはキリストの苦難と死を、ここで、いま起こっていることとして「記憶する」。そして、彼らは彼らと他者とに与えられる将来の祝福について瞑想する（この讚美歌の場合には、この世での生涯が終わった後の解放の希望である）³⁹。

受肉についてと同じように、キリストの十字架上の苦難と死はただ一度の出来事である。それにもかかわらず、キリスト者たちは、神が必要を抱える人々に「貢献」し続けている現在進行形の現実として、キリストが苦しむこと、また、彼らがキリストと共に苦しむことは、今でも継続しているリアリティとして捉えている⁴⁰。聖餐の典礼やその他の典礼的な「想起」の中で礼拝者たちは、神が地上に来られ、従順と正義の生涯を生き、最後には彼らが生きるために苦しみ、御自身のいのちを与えたほどに彼らを愛しているという「福音」と向き合わされる。

この福音の物語が、神は「私」のために御自身を犠牲にしたのだと主観化されるとき、キリスト者が自分自身を犠牲にし、他者に貢献しようとする力強い動機に結びついていく⁴¹。新約聖書の多くの箇所がキリストの犠牲的「貢献」はキリスト者の倣うべき模範であるという前提を反映している。キリスト者がキリストの模範に従うべきだと招く有名なテキストの一つは、キリスト教の結婚式で頻繁に読まれる聖書箇所である。エフェソの信徒への手紙で、使徒パウロがこう記している。「あなたがたは神に愛されている子供ですから、神に倣う者となりなさい。キリストがわたしたちを愛して、御自分を香りのよい供え物、つまり、いけにえとしてわたしたちのために神に献げてくださったように、あなたがたも愛によって歩みなさい。」⁴²さらに、数節後に、彼は夫たちにあのよく知られた指示を書き加える。

夫たちよ、キリストが教会を愛し、教会のために御自分をお与えになったように、妻を愛しなさい。キリストがそうなさったのは... 教会を清めて聖なるものとし、しみやしわやそのたぐいの

³⁹ キリスト者がどのようにこの讚美歌に接近していくのか、また、一般的にキリストの十字架に接近していくのかということをもさらに広く考察するするためには、Jeffrey P. Greenman and George R. Sumner, *Unwearied Praises: Exploring Christian Faith Through Classic Hymns* (Toronto: Clements Publishing, 2004), 73–82 のより拡大した瞑想が参考になる。

⁴⁰ 洗礼と聖餐式への参加を通して、また、信仰の訓練を通して、キリスト者たちは自分自身を、キリストの死において彼と結ばれている者と見るようになる。それは、彼らが「信じて」、新しい永遠のいのちへと「キリストと共に復活させられ」（コロサイ 2：12）るためである。洗礼と聖餐に関するキリスト者間の共通の見方を特定しようとする試みに *Baptism, Eucharist and Ministry* (Faith & Order Paper No. 111; Geneva: WCC Publications, 1982)がある。そこには、ペルーのリマにおける教会世界会議で、カトリックとプロテスタント、正教の代表者たちが共同で行った重要な事例が記されている。

⁴¹ もう一つの有名な讚美歌としては、“When I Survey the Wondrous Cross”がある。この曲では、神の貢献がもたらす感情的な衝撃と倫理的な影響がよく表現されている。“Were the whole realm of nature mine, That were a present far too small; Love so amazing, so divine, Demands my soul, my life, my all.”翻訳と注解は、J. R. Watson, *An Annotated Anthology of Hymns* (Oxford: Oxford University Press, 2002), 134–36 を参照。日本語版のためには、『日本聖公会聖歌集』の 370 番「みさかえのイエスの十字架あおげば」、『賛美歌』の 142 番「さかえの主イエスの十字架をあおげば」などを参照。

⁴² エフェソの信徒への手紙 5 章 1–2 節。

ものは何一つない、聖なる、汚れない、栄光に輝く教会を御自分の前に立たせるためでした。そのように夫も、自分の体のように妻を愛さなくてはなりません。妻を愛する人は、自分自身を愛しているのです。わが身を憎んだ者は一人もおらず、かえって、キリストが教会になされたように、わが身を養い、いたわるものです。わたしたちは、キリストの体の一部なのです。⁴³

パウロは、キリストの教会への犠牲的な愛を思い出すことが夫たちの妻への愛を動機付け、含蓄的にキリスト教会のすべてのメンバーが彼らの隣人を愛することを動機づけることになると考えていた。「キリストがわたしたちを愛して、御自分を香りのよい供え物、つまり、いけにえとしてわたしたちのために神に献げてくださったように。」⁴⁴、と。

キリストの復活：新しいいのちを他者と分かち合うという貢献

聖書とキリスト教の伝統によると、イエスの復活は、キリストの降誕、受難、死の中心的な目的の一つを成就した。それは、永遠のいのちという神の賜物である。「永遠のいのち」は、単純に永遠に終わらないいのちを意味しない。もっと重要なのは、それが神のいのちを反映し、神の愛に満たされた人生の質 (quality of life) に言及しているということである。それは、希望と正義と死の支配からの自由、生けるキリストと他者との一致に特徴付けられた「新しい」、「実り多い」いのち・人生である⁴⁵。キリスト教の世界観の中では、それは人間が元々喜ぶために創造された、そのようないのちである。

それゆえ、伝統的キリスト教において、犠牲的に生きることも、他者のために死ぬことさえも、イエスの模範に倣うこと以上のことである。すでに述べたように、聖書と教会の教理は人々が洗礼においてキリストと霊的に一つとなると教える。「キリストに結ばれるための洗礼」は、キリストとともに死に葬られるだけではなく、その死から新しいいのちへの復活に結びつくことをも意味する⁴⁶。それゆえ、キリスト者は、復活のキリストの霊が地上のキリストの体である教会を形成する信者たちのうちで今も生きているからこそ、献身的に貢献しようとする気持ちが強められるという聖書の教えを受け入れている。使徒パウロがキリストの死といのちのうちでキリストと自分は一つとされていると述べる考え方は、伝統的キリスト教において規範的な考え方である。

⁴³ エフェソの信徒への手紙 5 章 25-30 節。

⁴⁴ 他の箇所でも、使徒ペテロは、しもべたちに対して、正しく利益を受け取れない時にも主人を尊敬し、「良い行い」を続けるように勧告している。「…しかし、善を行って苦しみを受け、それを耐え忍ぶなら、これこそ神の御心に適うことです。あなたがたが召されたのはこのためです。というのは、キリストもあなたがたのために苦しみを受け、その足跡に続くようにと、模範を残されたからです。」(I ペテロ 2 : 20-21)

⁴⁵ キリストの復活による新しいいのちに関する説明は、ローマの信徒への手紙 4 章 25 節、6 章 4、9 節、7 章 4 節、コリントの信徒への手紙第一 15 章、ペテロの手紙第一 1 章 3 節を参照。古代近東、ギリシャ・ローマ世界、第二神殿期、新約聖書内における死生観については、Richard N. Longenecker, ed., *Life in the Face of Death: The Resurrection Message of the New Testament* (Grand Rapids, Mich.: Eerdmans, 1998)を参照。

⁴⁶ キリストとキリストのからだなる教会との結合として洗礼を述べる聖書箇所について詳述した、脚注 32 と 40 を参照。新約聖書、特に使徒パウロは、「物語られた」言葉で洗礼を語る。つまり、彼はキリスト教の大きな物語の光の中で、洗礼の特徴を説明しているのである。特にローマの信徒への手紙 6 章 1-11 節とコロサイの信徒への手紙 2 章 9-15 節を参照。しかし、洗礼は、罪の「洗い」や聖霊の受領など、他の象徴的意味をもつと記されていることも重要である (使徒 2 : 38、22 : 16、I コリント 12 : 13)。

生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるものです。⁴⁷

この重要な箇所は、キリストと一つに結ばれている信者を通して「今も」生き、愛し、与え続けているキリストの愛、キリストの自己犠牲、そしてキリストの臨在というテーマを併せて語っているのである⁴⁸。

結論

『貢献する気持ち』において、滝久雄は「お蔭さまで」という日本語表現について（英語では“I am indebted to you (for it)”と訳される⁴⁹）、興味深い議論をしている。滝は、この慣用句が「自分が社会で生きていかれるのは、他者に生かされているという意味あい」⁵⁰を表現していると述べる。それゆえ、滝によると、「お蔭さまで」は、それが「見ず知らずの人にさえ自分が『生かされている』ことに対する感謝の気持ち」を表しているがゆえに、「まさにその挨拶を交わす私たちは『ホモ・コントリビューエンス』といったイメージだ」と言える。滝は、この「挨拶言葉にみる貢献心」に関する論考を、このように結論している。

... 「お蔭さまで」という挨拶には、わが国固有の信仰である「八百万の神」といった汎神論的な考え方に深いところで関係するものと推察される。つまり「何にも宿る神様のお蔭」といった感謝の思いが込められていると考えられる。⁵¹

これまで見てきたように、キリスト教礼拝の主要な目的の一つは、三位一体の神に対する礼拝者たちの「お蔭さまで」という強い感覚を育成することである。御子を与えてくれた父なる神へ、御霊を与えてくれた神の御子へ、新しいいのちを与えてくれた聖霊なる神への感謝である。理論的に言えば、神によって深く愛され、「生かされている」というこの経験によって、新しい「人生のモード」（人生の様態）が生み出される⁵²。その新しい人生モードは、神のいのちを模範とし、神のいのちによって力付けられるものである。

受肉、キリストの苦難と死、そして、復活は、正教、カトリック、プロテスタント教会にとって、神がご自分の子どもたちを愛し、受け入れているということの最大の根拠であり、またその愛が彼らの人生に違いをもたらすものであること確かな根拠であり続ける。受肉の典礼は、過去・現在・未来において、御子の降誕を通して卑しい状態の人々をも受け入れる神の受容の物語に人々を引き込み、御子の受難と死の典礼は、

⁴⁷ ガラテヤの信徒への手紙 2 章 20 節。

⁴⁸ 他の関連する聖書箇所には、ローマの信徒への手紙 8 章 9-19 節、コリントの信徒への手紙第一 6 章 19 節、12 章 4-31 節、コリント人への手紙第二 4 章 7-12 節が含まれる。こういった様々な典礼テキストとともに用いられる聖書箇所は、信者たちの中に生き、活動しているキリストの霊が、「キリストが愛したように愛する」という願いを彼らにもたらずというキリスト教における共通の視点を提供するものである。それは、その愛の動機が、ただキリストの愛と救いの経験のゆえにキリストの模範に倣いたいと願う思いから生まれてくるだけでなく、聖霊からの贈り物であり、「実り」であることをも意味している。

⁴⁹ 滝、『貢献する気持ち』、85-87。滝、*Homo Contribuens*、50-51 頁。

⁵⁰ 滝、『貢献する気持ち』、86 頁。

⁵¹ 前掲書 87 頁。

⁵² 「人生モード」については、特に前掲書 74-85 頁を参照。

彼らを過去・現在・未来において「私」のための偉大で個人的な神の犠牲の物語へ引き込む。他者との連帯の中でこの神の救いのアナムネシス（記憶）は、キリスト教礼拝者のうちに、自分自身と同じ隣人の必要に共感する気持ちを育成するはずである。それは、神が完全に人々を、そのすべての必要とともに受け入れているという認識と、神が彼らに平安と永遠のいのちを与えるためにすべてを犠牲にするという認識を染み込ませることでもある。

それゆえに、神を礼拝する共同体が自分たちの救いとキリストとの結合の物語を「記念する」とき、彼らは、神が自分たちをご自身の手段あるいは主体として選んでくださったのだと考え始める。つまり、彼らがキリストにあって体験した受肉的かつ犠牲的愛と同じ愛を示すことによって、他者に新しいいのちを「貢献する」ために、神に選ばれたのだと自覚していくのである。